

彫刻家・中野桂樹

—ふるさと津軽への想い—

木戸 奈央子

(つがる市教育委員会
教育部文化財課・学芸員)



「母神」像＝2020（令和2）年9月30日・筆者撮影

つがる市は大正から昭和にかけて多くの芸術家を輩出していることをご存知だろうか。版画家の棟方志功（1903-1975、青森市）と交遊のあった画家の松木満史（まんし・1906-1971、旧木造町）や、同じく画家の小林喜代吉（1897-1983、旧森田村）、彫刻では工藤繁造（1900-1936、旧柏村）などが、地元で芸術文化の礎を築いていった。本稿で紹介するのは、旧木造町出身の彫刻家中

野桂樹である。中野桂樹（1893-1965）は、つがる市木造蓮川の農家に生まれた。14歳で弘前の仏師早坂寿雲に師事し、彫刻家を目指していく。1913（大正2）年に上京し太平洋研究所に入所。その後、東京美術学校（現東京藝術大学）彫塑科へ入学し彫刻を学んだ。桂樹の活躍は官設の美術展覧会を中心にみる事ができる。在学中の1918（大正7）年に文部省美術展覧会（文展）に初入選してからは晩年まで積極的に出品し、官展の常連となっていく。美

術団体の活動にも積極的に関わり、「六花会」や「北溟会」、「東奥美術社」等の中心メンバーとして活躍し、審査委員を務めるなど後進への指導にもあたった。

この作品は1955（昭和30）年の第11回日展に出品されたものだが、その2年後に五所川原市において青森県平和産業大博覧会（通称五所川原博）が開催を控えていた。前年に展覧会のために帰省していた桂樹は、「公園等に平和の女神のような像を建てたらどうか」とインタビューに答えている。

川原駅前大通り交差点のロータリーに移設され、記念式典も執り行われた。ロータリーの撤去後は公園へと移設し、立佞武多の館前へと場所を移している。場所を変え時代を経て「母神」像は今日も人々を温かく見守り続けている。他にも故郷への想いが感じられるエピソードがある。1939（昭和14）年に東奥日報社が企画した「在京芸術家座談会」では、棟方志功や太宰治など当時第一線で活動していた青森県にゆかりのある芸術家や文化人が集った。

桂樹は自己紹介の中で銘菓「生薑糖」と地元の御山参詣について紹介したほか、「同じ郷里の人々がある一つの会に集まるということは、そのことだけで充分に目的が達成されているし、お互いに何かの時に役立つということも聞いている」と述べている。

この話が直接結びついたかどうかは不明だが、日本の国連加盟と市制施行3周年を記念して開幕した五所川原博では、「母神」像が会場の泉水に設置された。閉幕後には五所川原の地でも同郷の仲間がどれだけ心強い経験をもとに話したのだろうか。本人にとってわずか14年しか生活しなかった故郷だが、その想いは人一倍強かったのかもしれない。